

印欧語動詞の語幹形成母音の起源：

アナトリア諸語にみられる特徴は古いのか、新しいのか？

吉田 和彦

京都産業大学

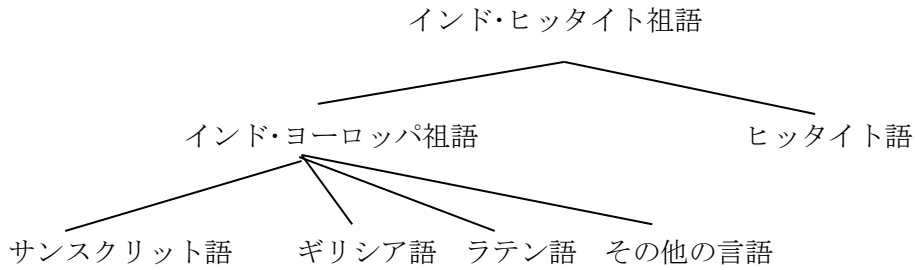
<kazuhiko.yoshida@gmail.com>

I. 印欧諸語の分岐モデル

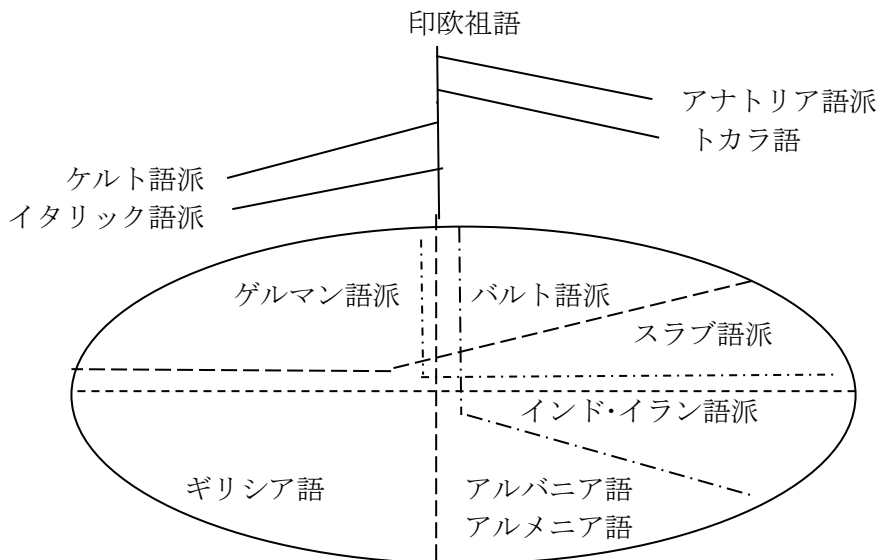
(1) ヒッタイト語発見以前の見方



(2) インド・ヒッタイト説



(3) 新しい見方



II. ヒッタイト文献学の進展

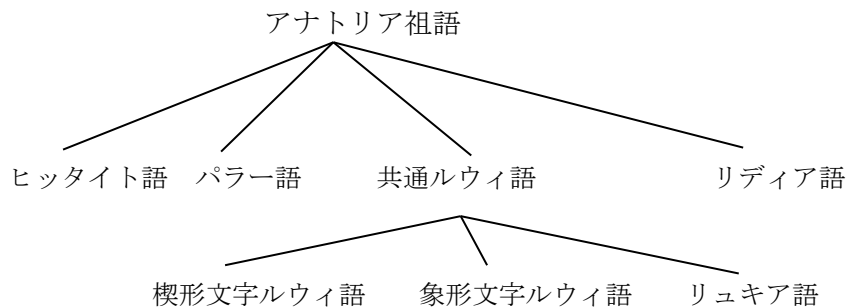
(4) 字形の違い

	ツクラシ文書 (古期ヒッタイト)	アルヌワンダ王の祈り (中期ヒッタイト)	ブドゥヘバの祈り (後期ヒッタイト)
ak			
ik			
ni			
uk			
šar			

(5) 粘土板の時期区分 (その方法については Yoshida 2021a で解説されている)

1. OS = 古期ヒッタイトのオリジナルの粘土板
2. OH/MS = 古期ヒッタイトテキストの中期ヒッタイトの時期のコピー
3. OH/NH = 古期ヒッタイトテキストの後期ヒッタイトの時期のコピー
4. OH/? = 古期ヒッタイトテキストで、記録された時期が不明の粘土板
5. MS = 中期ヒッタイトのオリジナル
6. MH/NS = 中期ヒッタイトテキストの後期ヒッタイトの時期のコピー
7. MH/? = 中期ヒッタイトテキストで、記録された時期が不明の粘土板
8. NH = 後期ヒッタイトのオリジナルの粘土板

(6)



III. 印欧語動詞の語幹形成母音

(7) athematic タイプ： 母音交替によって特徴づけられる (3 sg. *h₁és-ti, 3 pl. *h₁s-énti)。

thematic タイプ： 語尾直前に語幹形成母音*-e/o-を持っている。語幹が一定であり、アクセントの移動をとまなわず、母音交替を示さない (3 sg. *bhér-e-ti, 3 pl. *bhér-o-nti)。この2つのタイプのうち athematic タイプがより古く、分派諸言語においては、thematic タイプが生産的

に使われるようになる。

(8) Meillet (1903)

能動態	sg. 1	*-ō	pl. 1	*-o-me (vel sim.)
	2	*-e-si	2	*-e-te (vel sim.)
	3	*-e-ti	3	*-o-nti

ラテン語 agō, agis, agit, サンスクリット語 asmi, asi (< *assi), asti, ギリシア語 eimi
ギリシア語 3 人称単数現在 phérei, 未完了過去 éphere

(9) Jasanoff (1998, 2003) (cf. Watkins 1969)

sg. 1	*-h ₂	→	*-e-h ₂	→	*-o-h ₂	→	*-o-mi
2	*-th ₂ e	→	*-e-th ₂ e	→	*-e-th ₂ e	→	*-e-si
3	*-e	→	*-e-∅	→	*-e-∅	→	*-e-ti

thematic タイプの語尾は完了と中・受動態の語尾に類似していると考え、*-h₂、*-th₂e、*-e を再建した。そして幹母音*-eと*-o-の分布を、閉音節の e はアクセントの後で o になるという音変化によって説明しようとする（ギリシア語 génos < *génes、génous < genés-es、サンスクリット語 jānaḥ, jānaśaḥ、ラテン語 genus, generis）。

(10) Yoshida (2009, 2022)

印欧祖語に遡る thematic アオリストはサンスクリット語 avidat、ギリシア語 éide、アルメニア語 egit (< *(e)-uid-e(-t) ‘recognized’) という対応と古期アイルランド語 luid、ギリシア語 éluthe、トカラ語 A lac、トカラ語 B lac (< *(e)-h₁ludh-e(-t) ‘went’) という対応だけである (cf. Cardona 1960)。また、ゴート語では thematic 動詞が現在時制にしかみられず (能動態 baira, bairis, bairiþ)、過去時制では欠如していることである。→ 語幹形成母音は本来現在語幹にみられる特徴であった。そして現在語幹を形成する接尾辞*-ye-にその起源を求めた。

sg. 1	*'-ye-h ₂	→	*'-yo-h ₂	→	*'-y-oh ₂	→	*bhér-oh ₂
2	*'-ye-th ₂ e	→	*'-ye-th ₂ e	→	*'-y-eth ₂ e	→	*bhér-eth ₂ e
3	*'-ye-e	→	*'-ye	→	*'-y-e	→	*bhér-e

IV. アナトリア諸語の事実

(11) ヒッタイト語に代表されるアナトリア諸語において、幹母音*-e/o-によって特徴づけられる thematic タイプの動詞がほとんどない、あるいはまったくないという事実はよく知られている (Lehrman 1985)。他方、他の語派では幹母音*-e/o-による thematic タイプの動詞が生産的に用いられる。この事実から、ヒッタイト語は thematic conjugation について他の諸言語よりも古い状態を保持していると考えられる。したがって、幹母音*-e/o-による thematic タイプはアナトリア語派が祖語を離脱した後につくられたに違いない。

(12) しかしながらヒッタイト語においても、接尾辞-ye/a- (< *-ye/o-)や-ške/a- (< *-ške/o-)をともなう thematic タイプの動詞は数多く用いられている。

(13) 接尾辞-ške/a-を持つ動詞 (Kloekhorst 2008: 135–6)

	印欧祖語	古期ヒッタイト語		印欧祖語	古期ヒッタイト語
pres. sg. 1	*-skó-	ʕš-ke-e-mi	pret. sg. 1	*-skó-	---
2	*-ské-	ʕš-ke-e-ši	2	*-ské-	----
3	*-ské-	ʕš-ke-ez-zi	3	*-ské-	ʕš-ke-et
pl. 1	*-skó-	ʕš-ke-e-ua-ni	pl. 1	*-skó-	----
2	*-ské-	ʕš-ke-te-ni	2	*-ské-	----
3	*-skó-	ʕš-kán-zi	3	*-skó-	ʕš-ke-e-er

(14) 3人称複数-škanzi は、*-šké-nti に遡る（ヒッタイト語 anda ‘in(to)’ vs. ラテン語 endo (cf. Melchert 1994: 134)。ヒッタイト語では語幹母音は一貫して-(sĕk)e-である (cf. ラテン語 senēscō ‘I become old’, senēscis, senēscit)。伝統的な印欧語比較文法で受けられている、語幹母音 *-e~*-o-の交替はみられない。

(15) 接尾辞-ye/a-を持つ動詞

-ške/a-を持つ動詞の場合と同じく、古期ヒッタイト語において接尾辞はすべて*-ye-に遡り、*-yo-に遡る例はない（中期ヒッタイト語以降-ye-は次第に-ya-に取って代わられた：Yoshida forthcoming。uemiyar ‘they found’ KUB 17.10 i 37 などの-ar は音法則による：Yoshida 2021b。）。

(16) 潜在的な反例である、古期ヒッタイト語動詞 pé-eš-ši-ya-mi KBo 17.3 iv 18 ‘I throw’, pé-eš-ši-ya-u-e-ni KUB 35.164 iii 6 ‘we throw’, ú-e-mi-ya-u-en KBo 22.2 Vs. 14 ‘we found’, ħu-la-a-li-ya-mi KBo 17.1 iii 22, 17.6 iii 14 ‘I entwine’は、つぎの音法則によって2次的にもたらされた。アナトリア祖語*e> ヒッタイト語 a/’ ____ . R (cf. Yoshida 2010: 391)。この音法則は、1人称と2人称複数現在能動態語尾-uani、-tani (cf. Yoshida 1997)、u-語幹とi-語幹形容詞の単数属格 aššawaš (< *h₁és-eu-os) ‘good’、šallayaš (< *sélH-ej-os) ‘great, large’にも働いた。

(17) 接尾辞-ai/-ā-を持つ動詞

接尾辞-ai/-ā-を持つ動詞はヒッタイト語で生産的に用いられている。この接尾辞は、印欧語比較文法の観点からは、作為動詞をつくる接尾辞*-eh₂- が出名動詞をつくる接尾辞*-ye/o-に拡張された*-éh₂-ye/o-に遡ると考えられている (cf. Melchert 1997: 133f.)。armahh- (< *-éh₂-) ‘make pregnant, impregnate’: armā(i)- (< *-éh₂-ye/o-) ‘be(come) pregnant’ というダブルレット。

(18) Yoshida 2014 の見方 (Oettinger 1979: 358、Kloekhorst 2008: 132 の見方を否定)

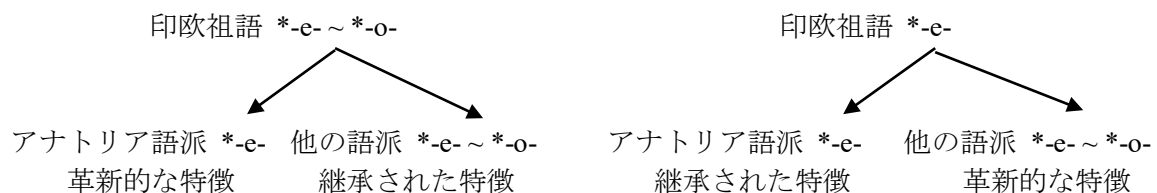
	現在形		過去形	
Sg. 1. -āmi	< *-ā-ya-mi	< *-éh ₂ -ye-mi	-ānun	< *-ā-ya-nun < *-éh ₂ -ye-n(+m)
2. -ā(i)ši	< *-ā-ye-si	< *-éh ₂ -ye-si	-āiš	< *-ā-ye-s < *-éh ₂ -ye-s
3. -āizzi	< *-ā-ye-ti	< *-éh ₂ -ye-ti	-āit	< *-ā-ye-t < *-éh ₂ -ye-t

Cf. アナトリア祖語*e> ヒッタイト語 a/’ ____ . R

(19) 小結：一般に受け入れられている見方によれば、語幹形成母音によって特徴づけられるヒッタイト語の能動態動詞は印欧祖語に再建される語幹形成母音*-e/o-の交替を保持していると考えられている。しかしながら、本節での分析結果によると、アナトリア祖語の時期に、語幹形成母音*-o-を再建する実質的な根拠が見出せない。ヒッタイト語の能動態動詞のパラダイムに共時的にみられる語幹形成母音-a-は印欧祖語の*-o-には由来しない。ここで引き出された知見は、語幹形成母音*-e/o-はパラダイム内部で交替するという伝統的な印欧語比較文法においてとられている見方と根本的に相容れない。

V. アナトリア諸語にみられる特徴は古いのか、新しいのか？

(20) アナトリア祖語に一貫して再建される動詞語幹形成母音が、アナトリア語派が分岐する以前の印欧祖語の状態を保持している特徴なのか、それともアナトリア語派内部での革新的特徴なのか？



(21) 中・受動態にみられる幹母音の分布

接尾辞 $-ye/a$ -については、ヒッタイト語のすべての時期において $-ya$ -が圧倒的に用いられている (Neu 1968、Yoshida 1990 のデータを参照)。他方、接尾辞 $-ške/a$ -については1人称単数と3人称複数において $-ška$ -がみられる。これは音法則で説明される (1 sg. $-škahḫa < *-\acute{s}ke-h_2e$ 、3 pl. $-škanta < *-\acute{s}kento$)。これに対して、パラダイムの他の位置では $-ške$ -が用いられる。 $-ye/a$ -を持つ中・受動態動詞ではにおいては $-ya$ -、 $-ške/a$ -を持つ中・受動態動詞では $-ške$ -が顕著であるというこの事実は幹母音の分布を理解するうえで重要な鍵を担っている。

(22) Oettinger (2013: 62)は、接尾辞 $*-\acute{s}ke$ -を現在形をマークする接尾辞 $*-s$ -と小辞 $*\acute{k}e$ ‘now, here’ (ラテン語 *cedō* ‘Give me! ← Give here!’) の結合であると考え、 $-ške$ -の母音 e は小辞 $*\acute{k}e$ ($*\acute{k}o$ ではない) との語源的な繋がりによるという注目すべき提案を行った。

(23) アナトリア諸語にみられる s -現在

ヒッタイト語：語根現在 (*ganēš(š)*- ‘recognize’, *paḫš*- ‘protect’, etc.)、 $-eš$ - ($< *-\acute{e}h_1-s$ -) を持つ起動相現在 (*nakeš*- ‘become important’, *šalleš*- ‘become great’, etc.)、 $-šš(a)$ -を持つ反復相現在 (*išš(a)*- ‘perform’, *ḫalzišša*- ‘call’, etc.)

楔形文字ルウィ語：arpaša- ‘be confounded’, mazzallaša- ‘be tolerant (?)’, pappāša- ‘swallow’, pipišša- ‘give’, puppušša- ‘crush’, tiyanišša- ‘fill, stuff’, etc.

(24) うえで示した多様な s -現在の存在により、後期アナトリア祖語の話者は $*-\acute{s}ké$ -を $*-s-\acute{k}é$ -と分節していたに違いない。これに対して、アナトリア以外の語派の話者にはそのような認識が失われた。ヒッタイト語の起動相現在 *nakeš*- ‘become important’ に対応する起動相は、ラテン語の *senescere* ‘to become old’ のように、 $-s$ -ではなく $-esc$ -によって特徴づけられている。

(25) 接尾辞 $*-\acute{s}ke$ -を s -現在の $*-s$ -と小辞 $*\acute{k}e$ の結合であるという見方が正しいならば、印欧祖語の時期に $*-\acute{s}ke$ -は母音 e によって一貫して特徴づけられていたことになる。したがって、この古い特徴はアナトリア祖語に保持された一方、他の語派では二次的に幹母音 $*-e \sim *-\acute{o}$ -の交替が導入されたと考えられる (ラテン語 *senescō*、 $-scis$ 、 $-scit$)。そして、この交替の理由をもっともよく説明するのは、接尾辞 $*-ye$ -を持つ動詞に起こった、閉音節の e はアクセントの後で o になるという、すでにうえの(9)、(10)で述べた音法則である。この音法則はヒッタイト語が祖語を離脱した後に生じた (ヒッタイト語 *nepiš* ‘heaven’ $< *-\acute{n}ébh-es \leftarrow *-\acute{n}ébh-s$ 、*aiš* ‘mouth’ $< *-\acute{h}_3éh_1-es \leftarrow *-\acute{h}_3éh_1-s$)。そして $*-ye \sim *-\acute{y}o$ -という交替が生まれてから、幹母音 $*-e \sim *-\acute{o}$ -の交替は他の動詞クラスにも広がった。

(26) 他方、この音法則はアナトリア語派に続いて印欧祖語から分岐したトカラ語には生じた。トカラ語現在第2類動詞は幹母音によって特徴づけられる。3人称単数 *āsām* ‘leads’ ($< *-\acute{h}_2eḡ-e-ti$)では幹母音 $*-e$ -の前の子音が口蓋化を示しているが、3人称複数 *ākem* ($< *-\acute{h}_2eḡ-o-nti$)においては二次的につくられた幹母音 $*-\acute{o}$ -の前の子音は口蓋化を蒙っていない。以上の分析から、幹母音の交替をもたらした、閉音節の e はアクセントの後で o になるという音法則は、アナトリア語派が印欧祖語から離脱した後で、トカラ語がなお祖語に帰属していた時期に生じたと考えることができる (ハンドアウト(3)の図を参照)。

VI. おわりに

語幹形成母音の起源は、印欧語比較研究の長い歴史において多くの研究者が取り組んだ問題である。最近でも Hill and Fries (2020)、Villanueva Svensson (2021)、Jasanoff (2022/2023)が独自の見方を展開している。しかしながら、 $*-e \sim *-\acute{o}$ -の交替の理由については何も述べていない。この講演では詳細な文献学的分析と広い視点に立った比較言語学的分析を通して、新たな見解を提示した。

参考文献

- Cardona, George (1960) *The Indo-European thematic aorists*. Unpublished doctoral dissertation, Yale University.
- Hill, Eugen and Simon Fries (2020) On personal endings of thematic verbs in Proto-Indo-European. In: Repanšek, Luka, Harald Bichlmeier and Velizar Sadovski (eds.) *Vácāṃsi miśrā kṛṇavāmahai: Proceedings of the international conference of the Society for Indo-European Studies and IWoBA XII, Ljubljana 4–7 June 2019: Celebrating one hundred years of Indo-European comparative linguistics at the University of Ljubljana*, 253–282. Hamburg: Baar-Verlag.
- Jasanoff, Jay H. (1998) The thematic conjugation revisited. In: Jay H. Jasanoff, H. Craig Melchert, and Lisi Oliver (eds.) *Mír Curad: Studies in honor of Calvert Watkins*, 301–316. Innsbruck: Institut für Sprachwissenschaft der Universität Innsbruck.
- Jasanoff, Jay H. (2003) *Hittite and the Indo-European verb*. Oxford/New York: Oxford University Press.
- Jasanoff, Jay H. (2022/2023) PIE **gʷih3ue/o-* ‘live’, *u*-presents, and the prehistory of the thematic conjugation. *Die Sprache* 55:61–81.
- Kloekhorst, Alwin (2008) *Etymological dictionary of the Hittite inherited lexicon (Leiden Indo-European etymological dictionary series, volume 5)*. Leiden: Brill.
- Lehrman, Alexander (1985) *Simple thematic imperfectives in Anatolian and Indo-European*. Unpublished doctoral dissertation, Yale University.
- Meillet, Antoine (1903) *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*. Paris: Hachette.
- Melchert, H. Craig (1994) *Anatolian historical phonology (Leiden Studies in Indo-European, volume 3)*. Amsterdam/Atlanta: Rodopi.
- Melchert, H. Craig (1997) Denominative verbs in Anatolian. In: Dorothy Disterheft, Martin Huld and John Greppin (eds.) *Studies in honor of Jaan Puhvel. Part I: Ancient languages and philology (The Journal of Indo-European Studies monograph, No. 20)*, 131–138. Washington D.C.: Institute for the Study of Man.
- Neu, Erich (1968) *Interpretation der hethitischen mediopassiven Verbalformen (Studien zu den Boğzköy-Texten, Heft 5)*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Oettinger, Norbert (1979) *Die Stammbildung des hethitischen Verbalsuffixes*. Nürnberg: Verlag Hans Carl.
- Oettinger, Norbert (2013) Die Herkunft des idg. Verbalsuffixes **-ske/o-*. *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft* 67: 57–64.
- Villanueva Svensson, Miguel (2021) The origin of the Indo-European simple thematic presents. *Indo-European Linguistics* 9: 264–292.
- Watkins, Calvert (1969) *Indogermanische Grammatik III/1: Geschichte der indogermanischen Verbalflexion*. Heidelberg: Carl Winter Universitätsverlag.
- Yoshida, Kazuhiko (1990) *The Hittite Mediopassive Endings in -ri. (Untersuchungen zur indogermanischen Sprach- und Kulturwissenschaft 5)* Berlin: Walter de Gruyter.
- Yoshida, Kazuhiko (1997) A further remark on the Hittite verbal endings 1 pl. *-wani* and 2 pl. *-tani*. In: Douglas Q. Adams (ed.) *Festschrift for Eric P. Hamp, Volume II (The Journal of Indo-European Studies monograph, No. 25)*, 187–194. Washington D.C.: Institute for the Study of Man.
- Yoshida, Kazuhiko (2009) On the origin of thematic vowels in Indo-European verbs. In: Kazuhiko Yoshida and Brent Vine (eds.) *East and west: Papers in Indo-European studies*, 265–280. Bremen: Hempen Verlag.
- Yoshida, Kazuhiko (2010) Observations on the prehistory of Hittite *je/a*-verbs. In: Ronald Kim, Norbert Oettinger, Elisabeth Rieken and Michael Weiss (eds.) *Ex Anatolia Lux. Anatolian and Indo-European studies in honor of H. Craig Melchert on the occasion of his sixty-fifth birthday*, 385–393. Ann Arbor: Beech Stave Press.
- Yoshida, Kazuhiko (2014) The thematic vowel **e/o* in Hittite verbs. In: H. Craig Melchert, Elisabeth Rieken & Thomas Steer (eds.) *Munus Amicitiae: Norbert Oettinger a Collegis et Amicis Dicitum*,

- 373–384. Ann Arbor: Beech Stave Press.
- Yoshida, Kazuhiko (2021a) Inferring linguistic change from a permanently closed historical corpus. In: Richard D. Janda, Brian D. Joseph, and Barbara S. Vance (eds.) *The handbook of historical linguistics*, Volume II, 196–213. Oxford: Wiley Blackwell.
- Yoshida, Kazuhiko (2021b) The Hittite 3 pl. preterites in -ar revisited. In: Hannes A. Fellner, Melanie Malzahn, and Michaël Peyrot (eds.) *Lyuke wmer ra. Indo-European studies in honor of Georges-Jean Pinault*, 538–545. Ann Arbor: Beech Stave Press.
- Yoshida, Kazuhiko (2022) On the origin of the Indo-European thematic present. *Gengo Kenkyu* 162: 119–144.
- Yoshida, Kazuhiko (forthcoming) The Hittite third plural preterites in -*jaer*. *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft*.